

アジア研究センター共同研究

アジアの社会遺産と 地域再生手法

レクチャーシリーズ

5

Kanagawa University Center for Asian Studies

社会遺産(social heritage)は、生まれたときにおかれていた社会的環境を指す用語である。社会遺産は主として人に対して使われることが多いが、地域や都市もそれぞれ社会遺産を有する。アジアの諸都市は、近代において似たようで異なる複雑な国際的背景の中でそれぞれ発達してきた。近年、アジアの諸都市では地域再生が活発に行われており、それら再生事例を対象とした研究も見られる。しかし、それらの研究の多くはガバナンスなど再生手法に関するものである。本共同研究では、それらの事例を「社会遺産」から見ることにより、その地域の歴史的・文化的・政治的文脈から重層的に分析することが可能になると考える。

共同研究では、アジア各地の地域再生事例とその周辺を対象としたフィールドワークをもとに検討を進める。2019年1月、タイ・バンコクにおける低所得者居住区の調査を実施した。2020年1月には中国・広州の客家調査を計画し準備を進めていたが、COVID-19感染拡大による渡航自粛から調査は中止となった。夏を過ぎても感染が治まる気配はなく、フィールドワークを手法とする私たちの研究は方向転換を余儀なくされた。一方で、オンライン授業などで導入したZoomといったオンラインミーティングシステムは、普段なかなか会えない海外研究者たちとの距離を縮めてくれる利点をもたらした。

そこで、2020年度後半から2021年度にかけて、アジアの都市・地域をフィールドにもつ研究者・実践者に登壇いただく連続レクチャー(公開講演会)を企画・開催することとした。リアルな場からデスクトップ越しのフィールドワークへの転換である。アジアの地域・都市再生事例の課題・背景を、社会遺産という観点から捉え、相互比較した上で、国際的討論を深めることを目指している。ここに収録された連続レクチャーの記録を通じて、再生手法としてのアジア的計画論について議論を深めるきっかけになれば幸いである。

神奈川大学工学部建築学科教授
神奈川大学アジア研究センター所長
共同研究「アジアの社会遺産と地域再生手法」代表

山家京子



アジア研究センター共同研究

「アジアの社会遺産と地域再生手法」レクチャーシリーズ

Vol.5

ベトナム・ハノイ 変化する都市の文化遺産

柏原沙織

(東京大学大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻 特任助教)

INTRODUCTION

上野正也(神奈川大学工学部建築学科 特別助教)

上野 本日の公開講演会は「ベトナム・ハノイ 変化する都市の文化遺産」と題しまして、柏原先生に来ていただいています。今回で連続講義としては5回目になりますが、次回もベトナムのホーチミンがテーマとなる予定のため、2回連続でベトナムについてのお話を伺います。それでは柏原先生、よろしくお願いします。

柏原 ただ今ご紹介いただきました、東京大学大学院新領域創成科学研究科の柏原沙織と申します。今日は「ベトナム・ハノイ 変化する都市の文化遺産」と題して発表します。

はじめに自己紹介をします。私は今、柏の葉キャンパス駅にある東京大学大学院で特任助教をしています。出身は京都です。専門はアジア大都市の町並み保全、まちづくりをテーマにしているのですが、元々は横浜市立大学に在籍していたときの共同研究で、ハノイ、台北、バンコクとマレーシアのパナンの4都市を巡る研究に参加しました。そこで特に関心を持ったハノイにフォーカスを置き、博士課程で「ベトナム・ハノイの歴史保全」をテーマに研究を行いました。ハノイがあまりにも面白かったので、たまにハノイの町並みを絵に描いたりもしています。

今日の内容ですが、4つのテーマでお話をさせていただきます。最初に「文化遺産と変化」について前段でお話をした後に、「ベトナム・ハノイ旧市街の文化遺産と地区を取り巻く変化」、続いて、ハノイの無形文化遺産の一つ「職業の通り」の変容に見るハノイならではの変化を、そして最後に、「変化のマネジメントへの提案に向けて」として、現在進行形で分析中の内容を少しご紹介いたします。

LECTURER



柏原沙織

(東京大学大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻 特任助教)

コンサルティング企業で公共部門の業務に従事した後、2012年から横浜市立大学グローバル都市協力研究センターまちづくりユニットの共同研究プロジェクトをきっかけに、アジアの歴史的環境保全の研究に取り組む。特に関心を持ったベトナム・ハノイの商業地区を対象に、歴史的都市景観の変容について研究中。2018年東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了。2019年より現職。博士(工学)。

LECTURE

地文化遺産の保全対象の広がり

まず最初に、都市の「文化遺産の保全対象の広がり」についてお話しします。文化遺産というと、単体の歴史的建造物や歴史地区といったものが頭に浮かぶと思いますが、1960年代には、その1個1個の建物やモニュメントが対象になっていました。そこから徐々に広がっていき、面的なエリアへと保全の対象が広がっていき、さらに1990年代にかけて無形文化遺産や文化的景観、さらに「リビングヘリテージ」といった、より変化しやすいけれども大事なものが保全対象になっていきました。2000年代以降はさらに「動態的保全」がキーワードになり、変化を前提としながら、その地区ならではのものを守っていくという流れになってきています。2011年にユネスコが提唱した「歴史的都市景観(Historic Urban Landscape:HUL)」に代表されるように、変化を前提としてどのように守っていくのかということが、今の流れになってきています。

都市の文化遺産の変化のマネジメント

次に、「都市の文化遺産の変化のマネジメントはどういうことがあり得るのか」を考えていきます。まず、歴史地区を取り巻いている変化として、主に3つ、よくいわれることがあります。一つ目は「グローバル化」、それから「ジェントリフィケーション(gentrification)^{※1}」、さらに、歴史地区の独特のまち並みに引き寄せられる「観光化の影響」が非常に大きくなってきています。

先ほど申し上げたこのHUL、歴史的都市景観についての書籍では、こういった「変化のマネジメントが必要である」といわれています。これまでは例えば点的なもの、1個の建物だけを守るということであれば、凍結的な保存は可能だったのですが、こういった動的なものも含まれるようになってからは、変化を許容せず凍結的に守るのではなく、言い換えれば保存と開発を二項対立で捉えるのではなく、同じ「変化」という軸上において、その変化のマネジメントをしていくことがより必要といわれています。

その変化の内容として一つ代表的なものは、「速度のコントロールが必要である」ということです。これはもうちょっと考えていきたいところですね。つまり、この「変化の速度」といったときに、一体何の変化を対象とするのか、マネジメントする対象は何になるのかということ、またどの程度の変化を許容するのかという変化の基準も考えていく必要があるのではないのでしょうか。このような問いを踏まえると、どういった方向でコントロールするのかということについて、より具体的に考えることができると思います。

また、速度以外に変化の様相を捉える視点は他にないのかということ、さらにこういったマネジメントにおける基準や方向は一体誰が決めるのかといった意思決定という問題も発生してきます。

この後のお話は、私がハノイで考えた「変化のマネジメントの対象」、それから「許容できる変化の基準を導く方法論」、それから「速度以外の視点」、この3つについてお話をしていきます。

※1 地域に住む人々の階層が上がると同時に、地域全体の質が向上することを意味する。「都市の富裕化現象」、「都市の高級化」ともいう。

ハノイ旧市街の起源

ベトナム・ハノイの紹介と文化遺産のお話に移ります。先生方の中にも行かれた方も多いかと思うのですが、ハノイはベトナムの北部にある首都です。約900年間、ベトナムはずっと中国の支配下にあったのですが、1010年にハノイが遷都され、そこから封建時代、ベトナムの宮廷時代が始まります。時間が飛んで19世紀後期になってくるとフランスの植民地になり、その後、独立してからは長い戦争の時代に入っていきます。フランスから独立した後に社会主義化され、これは今もずっと続いています。独立後もアメリカとのベトナム戦争、その後南北ベトナム再統一を経た後に、1970年代の終わりに起こった短期間の中越戦争と、長い戦争時代を経てきました。

社会主義化の中で計画経済が限界を迎えて、経済が自由化される1986年に開放路線に転じてからは、どんどん経済が発展している状況になっています。

これがハノイ中心部の航空写真[図1]で、今回お話しするハノイ旧市街は太い白枠のエリアです。ここは昔からある商住混合地区で、2004年に地区全体が国の文化財として指定されています。このエリアには同業者が集まっている通りが多くあるのですが、さまざまな同業者が集まる個性的な通りがギュッと固まった集合になっているところが一つの特徴になっています。全体が81ヘクタールで、79本の通りが存在しています。2017年時点で人口5万70人と、結構高密度なエリアになっています。

統計がちょっと古いのですが、2002年時点でここには5,243件の事業世帯がありまして、中でも特に多いのが商業、観光業、サービス業で、94%を占めています。残りの6%程度は手工芸品製造となっています。元々このエリアは手工芸品販売、製造販売が主だったのですが、現代ではほとんどがサービスや商業になっています。

旧市街の西側に、シタデル(Citadel)と呼ばれる地区があります。ここには元々宮廷があり、旧市街はこのエリアに対してサービスを供給する地区として発展してきました。旧市街は1990年代からまち並み保全の取り組みが行われていて、特に大事な第一級保存地区、その他の第二級保存地区と、保全規制がかかっています。南側はホアンキエム湖を挟んでフランス地区という植民地の時代につくられたエリアになっています。現地に行かれた方は、恐らくこのホアンキエ

ム湖の周辺であるとか、北西にある西湖とか、旧市街の真ん中に「ドン・スアン市場」があるのですが、そういったところを思い出していただけののではないのでしょうか。

先ほど申し上げた通り、旧市街はシタデル(宮廷地区)への供給源として出発しました。旧市街の人びとは、ハノイの周辺にある「職人集落」と呼ばれている、村民の7割以上が同じ職業に従事している集落がいくつもあるのですが、そこからこの宮廷地区に仕えるために移住してきました。こうした人びとは同郷者であり同業者です。彼らは移住してきた村ごとに固まって住んで、その居住地の中に通りが通されたというところで、同業者町の通りはこのような起源になっています。この出身集落の職のグループごとに、村の守り神や職業の創始者といった故郷に関連する信仰や祭礼の祠を立てていまして、それが今でも残っています。



[図1]

通り名に見るギルドの名残

こういった起源を持っているところなのですが、当初は宮廷に依存した需要、ニーズがあったものの、どんどん経済地区として発展していき、17~18世紀にかけては宮廷だけでなく全国的な商売の中心地になっていきました。17世紀には定期市が開かれて、職能や特産品ごとのギルド※2のエリアでの販売が行われていたということが文献に書かれています。

これが植民地にされる直前ぐらいの状況ですが、売っている物の材料ごとに色分けをした地図[図2]になっています。見ていただくと、やはり同業者が非常に集まっていたことが見て取れるかと思います。

その名残が今でも通り名に見られるようになっていて、元々の通り名が今でも使われています。通り名によく出てくる「ハン(Hàng)」は「何々のお店」という意味で、この後に続いている単語が売っていた物の名前になっています。例えば「ハンチュウ(Hàng Chiếu)」だと「ゴザ屋通り」、「ハンザイ(Hàng Giấy)」だと「靴屋通り」といった名前になっています。この地図[図3]の赤色で示しているところが、元の通り名が職業名の通りになっているところで、50本と非常に多く

なっていることが分かっていただけるかと思います。

※2 商工業者の間で結成された職業別の組合。



[図2]



[図3]

植民地政府による介入

封建時代まではこういった職業の通り、同業者町の通りがずっと栄えていました。ただし、植民地政府の介入も行われました。商売形態としては、元々は路上で青空市みたいにやっていたのですが、道路は通行空間としてしっかりと確保しようということで、通りは商業空間ではなく、交通の空間に変えられていきました。このときには路上市を撤去して、ドン・スアン市場という大きな市場をつくって、そこに商人を集めて集約していくという動きが取られました。

それから、同業者町の通りに対しては、フランス軍やフランス人の居住者、また本国向けの需要に応じて作るのがだんだん変わっていったり、あるいは新しい道路を造ったところに新しい同業者の集積が出てきたりといった影響も見られました。これが植民地期の様子の写真なのですが、例えばこちらの「Hàng Nón」(帽子)通り[図4]では帽子屋が集まっていたり、「Hàng Mả」という通りでは、死者のお棺に入れるお金などの「冥器(Mả)」を売っているお店が集まっ

ている通り〔図5〕など、通り名に関連するものを売る通りが当時もあった様子が見て取れます。



〔図4〕



〔図5〕

計画経済期の事業活動の停滞

その後、植民地期が終わった後に社会主義化されて計画経済期に入っていくのですが、そこでは生産流通システムと手段が全部国有化されて、国家管理のもとに動かされました。個人事業は規制されてしまって、元々個人でやっていた店舗や工房は「公私合営」、もしくは「合作社（コーポラティブ）」というかたちに変えられていきました。個人の事業として自由に作ったり売ったりできなくなってしまったということもあって、元々手工芸品を作っていた技術が断絶してしまったというのが、大きなターニングポイントになっています。

こうして同業者町の通りがどんどん衰退していく中で、この周辺にあった職人集落と同業者が集まる通りは引き続き取引があったのですが、集落と通りとの関係も衰退していくことになります。また、計画経済期の旧市街は、商業地区ではなくて、居住地区であったといえます。

その後、1954年以降になると、社会主義化されたハノイから、ブルジョア革命を恐れた富裕層がどんどん本国に帰ったり、ベトナム南部に逃げたりしたことで、空き家が出てきました。そういったところが、独立戦争を戦った帰還兵、あるいは国家公務員の幹部にトップダウンで分け与えられました。これは空き家だけではなくて、すでに住んでいた人がいるところも対象となった結果、住民が町家に詰め込まれることになり、個々の町家の過密化や、所有権の複雑化が起こりました。

ベトナム戦争中の空襲、その後の経済停滞

ベトナム戦争中には、米軍のハノイ空襲でかなり大きなダメージを受けたのですが、その中でも生き延びた建物は結構あったそうです。1976年に南北ベトナムが再統一されて、ハノイはベトナム社会主義共和国の首都として再出発しました。ただ、計画経済は継続され、さ

らにアメリカの経済制裁があったことで、経済がかなり停滞していました。この経済が停滞していた時期には開発が進まなかったということで、結果的には歴史的建造物が残るという保全にとってのメリットはありました。

経済自由化による商業活動の再興

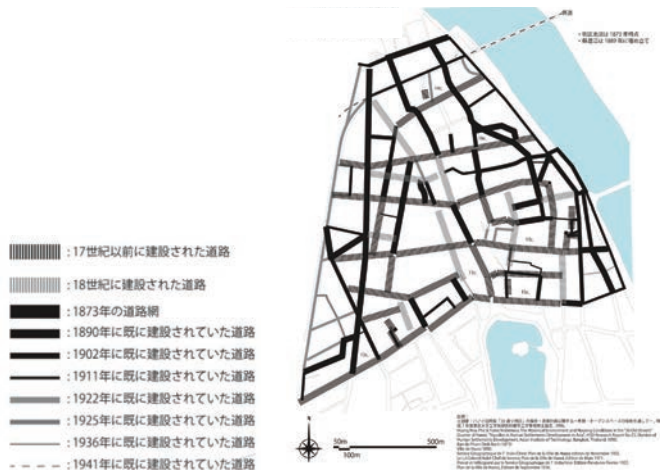
1986年に「ドイモイ政策」という経済自由化と開放路線の政策が導入されたことで商業活動が再開され、それに伴ってこの同業者町も再興していきました。ただ、かつての商取引上のギルドはほぼ消滅していて、同業者町の通り、通称「職業の通り」は、ギルドが解体したので、ただ小規模な個人店の集合というかたちに質変していきます。かつては製造販売していたのが、販売のみになっていくという変化がありました。さらに開発の圧力がどんどん高まっていき、それに伴って1990年代からはまち並み保存、戦後の不況で残留した歴史的なまち並みをどのように守っていこうかという取り組みが始められていきました。

ハノイ旧市街の有形文化遺産

これから文化遺産の話をしていきますが、ハノイ旧市街には有形文化遺産がいくつかあります。まず一つは道路網、それから町家、そして信仰施設や革命遺産といったものがあります。

順に説明をしていきますが、道路網はこの図〔図6〕の太い線で示しているところが植民地化前にすでにあった道路で、細い線で示しているのが植民地化後にできた道路です。こうして見ていただくと、19世紀までにできた封建時代までの道路を基盤に、植民地期の操作がちょこちょこ重なっています。このオーガニックな通りの道路構成が今でも残っているというのが、大きな特徴です。

信仰関連の施設は、集落の守り神や職業の創始者の廟がいくつもあるところと、あと、仏教系のバゴダというものもあります。この図〔図7〕は昭和女子大と千葉大の報告書から持ってきたものですが、地区全体にこういった信仰のための施設が点在しているのがよく分かります。



〔図6〕



(出典：千葉大学・昭和女子大学 2008)

[図7]

有形文化遺産としての町家

ここでは町家というのも一つ大きなユニットになっているのですが、これが伝統的な町家の空間構成になっています[図8]。これは「チューブハウス」という通称があるのですが、ベトナム語では「ニャーオン(nhà ống)」と言います。「nhà」が「家」で、「ống」が「チューブ」という意味ですが、ときに60mとか、長いときには100mにもなって、街区の反対側まで突き抜けている町家もあります。空間構成としては他の国で見られるような町家と同様ですが、前面の通り側が店舗になっていて、中庭を挟んで居住空間や寝室、台所が一番奥にあるという空間構成になっています。これが一応伝統的な空間構成にはなっています。

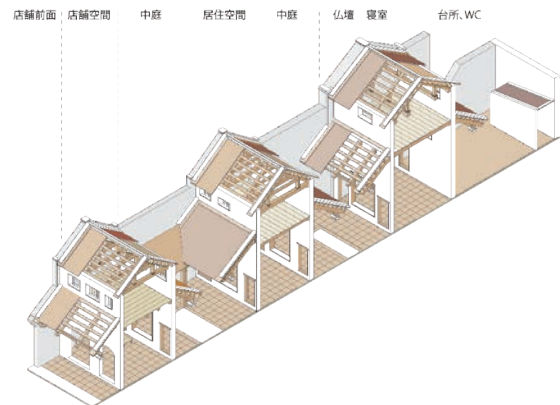
この空間構成は、地区全体の保全対象としても位置付けられています。間口が大体3mぐらいのところが多いのですが、かなり狭いです。非常に狭く、そして奥に長いかたちになっています。ただ、一つのご家族がずっと一世帯で住んでいるというのはかなりまれなケースで、ほとんどの事例では、計画経済期に分割された町家内部の区割りはまだ生きています。

これはまた別の通りで、1994年時点の、「町家がいかに分割されていたのか」がよく分かる資料です[図9]。赤で囲った線が、一世帯が住んでいる世帯別の場所になっています。これは元々、1階、2階、3階と一家族が所有していたのですが、この時点で12世帯に分割されて、非常に狭くなっています。元々の所有者の人がこの3階の一番後ろに追いやられてしまっています。

こうして集合住宅化されたことで、ちょっと分かりづらいのですが、入り口から通路、廊下をつくって、さらに、まだ残っているところ

があるかもしれないですが、中庭を潰して、屋根をかけて、居住空間にするというのがかなり横行していて、伝統的な町家の構成はかなりダメージを受けているのがほとんどです。

町家のファサードもいろいろありまして[図10]、ベトナムの伝統様式、中国様式、欧州の地中海様式、アルプス様式、それからアール・デコ様式と、こういったものが建築規制の中でもこのエリアの特徴として位置付けられています。

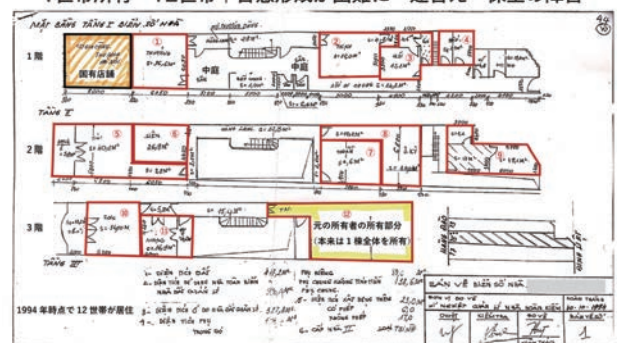


(出典：千葉大学・昭和女子大学 2008に加筆)

[図8]

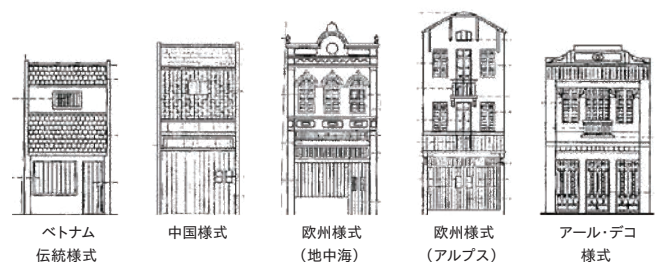
計画経済期に行われた町家の分割・改造 | 集合住宅化

・ 1世帯所有→12世帯 | 合意形成が困難に→建替え・保全の障害



(出典：Tran Huy Anh氏提供資料：首都命令No. 118/TTgに基づく各住戸の図面資料に筆者が追記・説明を追記)

[図9]



(出典：ハノイ旧市街建築計画管理規制 No.6398/QĐ-UBND)

[図10]

地区全体の建築規制・保全修復対象の通り

地区全体の建築規制や保全修復対象の話なのですが、建築規制は1995年時点から、高さは沿道の建物は3階建てまで、後ろ側は4階建てまでと指定されているのですが、あまり守られてなくて、4階の上にポコッと増築部分に乗っている状態がかなり見られます。素材はレンガや漆喰壁がよいとされているのですが、他の素材も散見されます。色彩もオレンジに塗ったり、紫に塗ったり、あまり伝統的な色彩に調和していないものも結構あるのですが、一応、規制は存在しているという状況です。

この図[図11]でハッチングを掛けている部分が、5類型・1954年以前のファサードに修復する、修景対象の通りになっています。ホアンキエム湖とドンサン市場の真ん中の一番大事な通りと、それに付随する周辺の通りについては、修景をしっかりとやっていこうという方針が出されています。ただ、実際にはほとんどの通りでかなり建物の建て替えや改造が進んでしまっていて、私が最初に行ったところ[図12]でも、「歴史地区だと聞いていたのに、全然そんな感じがしない」といったことが結構衝撃的でした。古い建物も残っているのですが、あまり状態は良くないところとか、何かが付いてしまっているところも結構ありまして[図13]、いわゆるまち並み保存というような、変わっていないことをよしとする保全の手法は、ここにはもうすでに当てはまっていないので、かなり限界があるのではないかとことも感じていました。



(出典:ハノイ旧市街建築計画管理規制 No.6398/QD-UBNDより作成)

[図11]



[図12]



[図13]

無形文化遺産としての「職業の通り」

ここまでが有形文化遺産の話で、これから無形文化遺産の話です。長らく住まれた方々も多いので、伝統的な祭礼や伝統芸能、伝統工芸が挙げられています。さらに、この同業者集積の通りも、計画規制の中では無形文化遺産と位置付けられています。これが通称で「職業の通り」という名前が付けられているのですが、今回は特にこれにフォーカスしてお話をしていこうと思います。

「職業の通り(phố nghề)」は、「phố」が「通り」、「nghề」が「職業」という意味で、「小規模の店舗の同業者が集積している通り」と定義付けられます。一例がこちら[図14]なのですが、これは漢方薬のお店がずらっと並んでいる「ランオン(Lãn Ông)通り」で、ここは計画規制の上でも伝統的な職業の通りとして指定されています。この通りに入ると漢方の匂いがフワッと漂ってきて、すごく独特の雰囲気を感じられるエリアになっています。

もう一つ、別の職業の通りとして「ハンマー(Hàng Mã)通り」というところがあり、祭礼用の装飾品がすごくたくさんあります。ここは、先ほど植民地期の写真でもお見せしたところで、「Mã」が「冥器」という意味の言葉なのですが、冥器だけでなく、冠婚葬祭系、パーティー用品系のいろいろな物がズラッと集まっているエリアになっています。これ[図15]は旧正月の前なので通り全体の印象が真っ赤になっていて、すごく雰囲気のあるところになっています。



[図14]



[図15]

地区を取り巻く変化—観光化・ジェントリフィケーション

次に、このエリアを取り巻く変化をざっくりお話していきます。ご多分に漏れず、やはり観光化というのは非常に大きな影響をもたらしています。ベトナムは1990年に外国人の個人旅行者の受け入れが開始され、その影響を受けて、1990年代以降、ミニホテルの建設が相次ぐようになっています。この通り[図16]は結構まとまった量の町家を保全型にリノベしたところなのですが、ほとんどが観光客向けの飲食店、パブやバー、レストランになっていて、ガイドブックでもバックパッカーストリートとして紹介されている通りになっています。

旧市街は元々問屋街だったのですが、そこにもやはり観光関連の業種が非常に出てきています。この通り[図17]は結構昔からステイタスの高いところで、今は衣料品問屋街になっているのですが、こういったギャラリーとか、あと、これは一見、衣料品のお店なのですが、「ここにホテルと書いてある」と思ってよく見たら、奥に入口というか

受付があって、手前は衣料品店で奥にホテルが入り込むというように、建物の内部にも進出するかたちになってきています。

他の通りでも、歴史的建造物を転用してホテルにする例はまだしも、2棟続きの中側の壁をぶち抜いて横に広げるかたちで美容院とタトゥーショップをつくるとか、空間構成をちょっと変えてしまっているところ[図18]も出てきています。

ジェントリフィケーションの話で言いますと、2010年代後半になってきて、結構おしゃれ系、健康志向系の飲食店が増えてきています[図19]。価格帯も東京の食べ物とあまり変わらないというか、ちょっと高めの価格設定になっています。新しい店に話を聞いてみると、やはり「観光客がたくさん通るところだから出店した」とのことで、もちろん「ベトナムの若者もターゲットにしている」という話はあるのですが、かなり高めの価格設定になっています。元々住んでいた人から「気軽にランチを食べに行く場所がなくなってしまった」といった話も聞いたりするので、ジェントリフィケーションが進んでいるのかなという状況になっています。



[図16]



[図17]



[図18]



[図19]

旧市街の規制・計画上の職業の通りの位置付け

このように職業の通りの変化が起こっているのですが、それが今、規制の上でどういうふう位置付けられているのかを見ていきます。最初に計画が始まったのが、第一期は1990年代からだったのですが、一番最初是有形文化遺産を対象に、チューブハウスや景観を守るといった話が多かったのですが、中でも1990年代にたくさん行われた調査の中で、ギルドの形式や伝統的な商売といったソフト的な側面についても守るべきだという意識が見られました。

続いて2000年代に入っていくと、有形文化遺産の保全事業が行われます。フランスのトゥールーズ市から国際協力の資金を得て、一部のところで建物が元の形に忠実なかたちで保全修復されたり、あるいは元々住んでいる人たちの合意形成を取りながら修復されたり、有形文化遺産の有効な保全の手法が模索されていきました。

それと同時に、フランスの方たちは無形文化遺産が非常に重要だと当初からおっしゃっていて、調査をかなり丁寧に行われました。そこで、職業の通りの同業者集積にも非常に関心を持たれて、「価値があるんじゃないか」ということで調査が進められていきました。

2010年代に入ると、「こういった有形・無形の文化遺産を統合していこう」という方針になっていき、マスタープランレベルでも職業の通りを文化遺産として位置付けて守っていこうという意識が見られるようになってきました。

さらに、2013年には建築計画管理規制が出され、この地区全体の価値を構成する要素の一つとして、職業の通りが明確に位置付けられるようになっていきました。さらに、これは結果がどうなったのかまだ確認できていないのですが、2017年時点で「承認待ちの提案」として見せていただいた中では、5つの職業の通りを特にフォーカスして修復していこうという方向性まで至っていました。

このように、早い段階から重要性は結構意識されていました。ただ、見出される価値は、結局この伝統的な職業の通りが中心になっています。また、職業の通りはこれまで生まれたり消えたりしていましたが、この生き物のような側面に対するマネジメントはまだ模索中というのが限界として挙げられます。

「職業の通り」の変容に見るハノイならではの变化

続いて、職業の通りが歴史的にどのように変化してきたのかを見ながら、どのように「ハノイならではの变化」を捉えられるかを見ていきたいと思います。職業の通りは地区内に70本以上あるのですが、そこに集積している職業がどういうふうに変化してきたのかを、文献調査や観察調査から10時点分集めました。集められた資料では1870年頃が一番古かったのですが、そこから植民地期、それから独立戦争中、自由経済化以後から2010年代まで、10時点を集めています。

この150年間分の変化を地図上にプロットしていきました[図

20]。グレーに塗っている箇所が、なんらかの集積が見られたところになります。

まずやってみたのが、通り名が元の職業を示す証左になっていたということもあり、元々の通り名に関連した職業の集積がどれだけ残っていたのかを見てみました[図21]。残っていたところが赤で、変わってしまったところを青としています。小さい星印は元の通り名に関連する店が1軒でも残っている通りで、統計調査等で確認できたところはこも見ていきました。元の通り名が職業の名前だった通りでは、最初は通り名関連の職業が残っていたけれど、計画経済直前とか経済自由化後10年の時点ですでにかなり少なくなってしまうて、2010年代の段階では、7本の通りだけでした。

これが1870年頃の職業の集積の分布になっています[図22]。地区全体に職業の通りが分布していることが非常に分かりやすいかと思います。ここは漢方薬の「Lãn Ông通り」ですね。鍛冶屋さんとか、「Hàng Mã通り」の祭礼用の紙製品、あとは船の帆などの製造業が全体的に多くなっています。

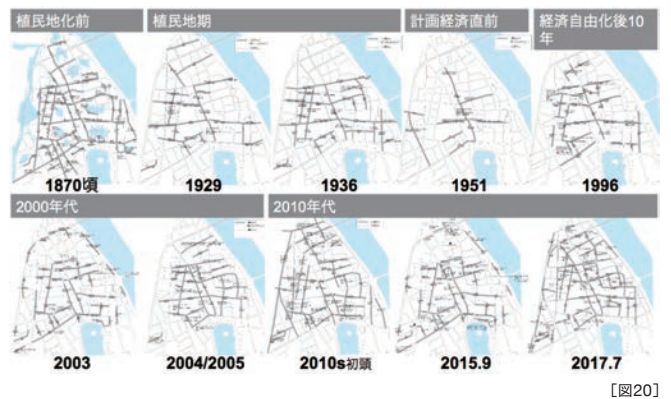
植民地期の商業の集積分布については統計資料があったので、それを基に見ていきました。それを見てみると、集積があったのになくなったところと、なかったのに出てきたところと、消えたり生まれたりしている状況を統計に基づいて明らかにすることができました[図23]。

社会主義化の直前の独立戦争中の段階では、データが全体で900件ぐらいとあまり多くなかったのですが、それでもいくつかの通りで同業者の集積があることが分かりました。

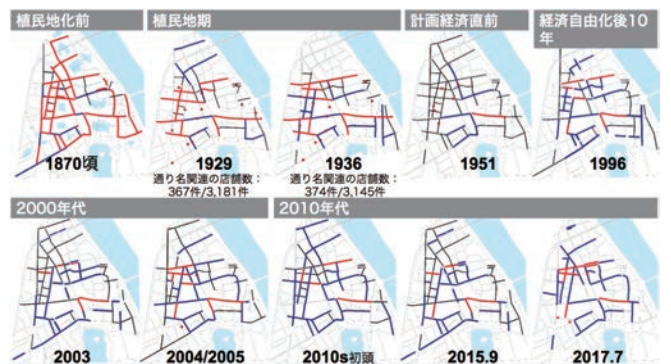
これが自由経済化されてから10年後の様子になっています[図24]。この時点では活発な商業が復興し、どんどん上がっていった状況になっていて、1990年に外国人の個人観光客が受け入れられたことから、観光地であるホアンキエム湖の近くでは土産物店などが出てきています。

2010年代から近年にかけては、1996年と、あと2000年代中に出てきた集積がいくつか定着していたことが特徴として挙げられます。どんどん観光化が進展していき、ここは第一級保存地区とされているエリアですが、この中に飲食店やカフェバーなど、観光客向けを意識したお店がかなり出てきています。さらに、街区の奥や2階部分にまで飲食店が進出していつている状況になっています[図25]。

こうして見てみると、ターニングポイントが連続し、すごく激動の時代を経てきているのですが、いろいろな職業の通りが常に複数分布していることが立証できました。



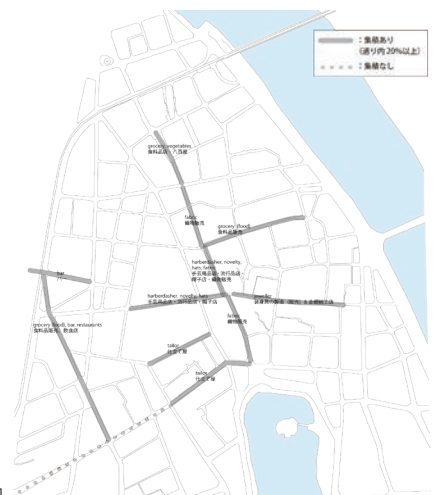
[図20]



[図21]



[図22]



[図23]



【図24】



【図25】

各通りの同業者集積の変化の分類

次に、各通りの集積、変化の仕方を分類してみました[表1]。これは横が一つの通りという見方なのですが、各通りに集積している職業で、最初のものを青にして、その直前のものと同じものは緑、少し変わったものは黄色、全然違う職業になった通りはオレンジという色分けで分類していきました。そうすると、7パターンを得ることができました。

通り名	通り名の意味と当初の販売品	経済自由化前後									
		1870年頃	1929年	1936年	1951年	1996年	2003年	2004/2005年	2010年代初頭	2015年	2017年
18. Phố Hàng Bạc	通り名: 銀貨幣鑄造	貨幣鑄造・街替・宝石商	宝石商・宝石加工	宝石商・宝石商・宝石加工等	装身具の製造(販売)&金銀細工店	金銀細工・街替・宝石	貴金属	宝飾品	銀製品の販売	貴金属	宝石商、両替商・石牌
76. Phố Tạ Hiện	通り名: 抗仏運動の指導者の名前	プロットなし	(データなし)	屋台	不明	プロットなし	食堂街	特になし(P) (レストラン)	外国人観光客の拠点・ツアー予約、ホテル、飲食店	飲食店	飲食店
1. Phố Bát Đàn	通り名: 素焼きの鉢	食器	食器・陶器販売、トランク・箱・スーツケース製造	食器販売	不明	プロットなし	プロットなし	衣料品	集積無し 色んな店。コーヒーなど	プロットなし	集積なし
30. Phố Hàng Đào	通り名: 染め物の赤・ピンク色 染色(絹)	絹	布地・織物販売 絹織・絹販売絹布・絹販売	織物・布地販売 絹織・絹製品販売	織物販売 手芸用品店・流行品店・帽子店	洋服・時計および洋服	衣料品	衣料品	あらゆる種類の色彩の上品な衣料品	衣料品	衣料品
19. Phố Hàng Bồ	通り名: 籠	左・半分: 食器 中央部: 籠 Hang Can ~ Hang Ngang: 籠	靴販売 小売店(商品不明)	靴修理・販売・製造 靴修理	手芸用品店・流行品店・帽子店	服飾小物(土産物)	プロットなし	手芸用品	元Hang Dep: 手芸用品(針、リボン、ボタン、糸)元Hang Bo: 色んな品物	裁縫洋品(Hang Can ~ Hang Ngang)	手芸用品
50. Phố Hàng Quạt	通り名: 扇子 Hang Dan通り: ベトナム製のリュート、宗教用品の製造販売	左: 楽器 中央部: 宗教用品 ■土	指物師・家具製造	指物製造	仕立て屋	仏具・木工品加工販売	線香と仏具	伝統的装飾品	仏壇、衣装、結婚式用品、葬式・祭礼用の旗	線香と仏具、木工品	仏具
61. Phố Ngô Gạch	通り名: レンガ	河川(蘇運江)(食べ物・市場)	石灰販売 レンガ販売	(データなし)	不明	染料	食品素材	(データなし)	Hang Duong寄りの東側は水産、スカーフ、衣料品。西側は針・縫製品	プロットなし	衣料品、飲食店(中央部)
17. Phố Hà Trung	通り名: 地名(河忠)	皮革めし工	靴製造・販売 革製品販売 仕立て屋、靴修理	革製品・靴の製造・販売 スーツケース・革製品製造	不明	プロットなし	帽子	バイクのシート 防水シート 仕立て屋	フェイクレザー製品(スーツケース、バッグ等)、金銀・外貨の両替	帽子	西: 両替商、東: 革製品



【図26】

【表1】

一番変化が少ない類型は、通り名に関連する職業がずっと維持されていたものです。他に、直前の職業と関連しながら徐々に変化していったもの、あるいは経済自由化前に転換した集積が50年以上維持されているもの、経済自由化後に転換した集積が20〜30年ぐらい維持されているものなどの類型が得られました。

あまり変わっていない通りとして、「ハンバック (Hàng Bạc) 通り」、銀屋さん通りがあります[図26]。元々貨幣鑄造をやっていたところが両替商や金銀細工、宝石商になっていった、今でも宝石商が集まっている通りです。

徐々に変わった通りの例は、この「ゴザ通り」です[図27]。ずっとゴザの製造販売をやっていたのですが、イグサから変えてプラスチックのゴザを作ったり、簾、あるいはゴザ以外のロープやテープなど、関連する他の商品も扱うようになったところもあります。これは植民地期に描かれた絵[図28]ですが、当時のゴザ屋さんはこんな感じだったのかなというのを載せてみました。

また、経済自由化前に変化した商業集積がずっと続いている通りとして、「籠通り」があります[図29]。1951年から手芸用品が集積し始めて、現在に至るまで続いています。この通り延長はあまり長いのですが、東の区間ではほぼ100%、手芸用品のお店が集まっています。

また、経済自由化後に転換した集積が確立している通りとしては、「扇子通り」があります[図30]。元々、扇子や楽器、宗教用品などを作っていたのですが、家具職人の通りに変わり、仕立て屋に変わり、それから仏具や木工品の販売を行うようになり、それが今に至っています。



[図27]



[図28]



[図29]



[図30]

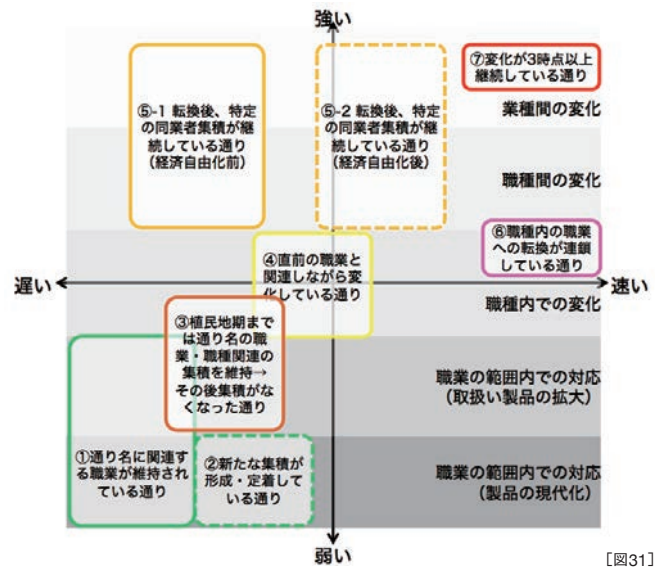
変化を捉える「速度」に加えて「強度」の視点

こうした7つの変化の類型から、変化を捉える「速度」ではない、もう一つの軸があるのではないかと考えてみました。それは「強度」です。変化の「速度」と「強度」の2軸上に、今回の分析で得られた7つの類型を並べてみたものがこちらの図[図31]になっています。元々、変化のマネジメントで出てきた変化の「速度」はこの横軸で、ハノイの職業の通りで考えると、集積している職業があまり変わらないところ、ころころ変わらないところが「遅い」、どんどん変わっていく、定着している時間が短いところが「速い」と考えています。

職業の変化の「強度」というのは、職業の変化の程度を表します。一番変化が弱いものでは、職業の範囲内で対応させる、製品を現代化して対応するものを指します。例えば「ゴザ通り」なら、イグサではなくプラスチックで作ってみる、プラスチックマットのように商品そのものを現代化するということです。少し強い変化になっていくと、職業の範囲内で対応することで取り扱い製品を拡大していきます。ゴザだけではなくロープも扱うようになっていくとか、そういった対応の仕方です。だんだん強くなって全く違う職業になっていくのは、例えばゴザ屋さんからレストランに変わるとか、そういったものを「強い」と定義しています。

この軸上で先ほどの変化の7類型をプロットしてみると、今現在、「伝統的なもの」として保全対象になっているのは、この一番左下の変化が最も遅くて弱い、いわゆる「歴史的・伝統的」というものですが、これは今回の調査で見てみたところ4本しかありませんでした。そのため、「ここだけ守れば、ハノイ旧市街の面白さは守れるのか」と考えたとき、そうではなくて、もう少し変化が比較的弱かったり遅かったりするもの、例えば、経済自由化以降50年にわたって同じ職業が定着している通りとか(遅い変化)、徐々に変化しながら、元をたどっていくと昔ながらの元々やっていた職業に行き着く通りとか(弱い変

化)、そういったものについても、今後の保全型マネジメントに含めてもいいのではないかと考えました。



[図31]

変化しつつ地区の独自性を継承するシステム

ここまでハノイ旧市街の職業の通りを見てみると、変化にさらされながらも、常に多様な職業の通りがあったことが分かりました。このことから、ハノイ旧市街には、変化しながら地区の独立性を継承するシステムがあるのではないかと考えています。これについて、「ハノイ的な変化を担保する動的なシステムとしての職業の通り」と表現してみました。これは、植民地期に、集積があったけれどもなくなったところとか、なかったけれども出てきたところという動きに見られるように、職業の通りが生まれたり消えたりしていく、それが時代を超えて継承されているというのがまず一つ、重要なシステムではないかと考えています。

次の特徴として、多様な職業の通りの連続から生まれる、独特の空間体験があります。これはハノイ旧市街の街区割り[図32]なのですが、街区の一边延長の中央値が大体70メートルぐらいです。そのため、徒歩1〜2分ぐらいでいろいろな職業の通りが立ち現れてきます。多様な職業の通りがぎゅっと詰まった密度で存在していることと、独特の街区割りで生み出される、ハノイ旧市街ならではの独自の空間体験は、ずっと変わっていなかったのではないかと考えています。「多様性と密度」から得られる独特の空間体験を大切に考えると、観光業種ばかりの職業の通りになってしまうと、多様性を傷つけ、ハノイ的な体験が損なわれてしまうのではないかと思います。マネジメントの基準として、「多様性と密度」の維持というのは大切な側面と思っています。

最後に、現代的な職業の通りがどう価値を付けられるかを考えてみます。「伝統的」を拡張するといっても、現代的な職業の通りをどのように考えていけば良いのでしょうか。ここで先ほどの2つの価値、

「システムの価値」「体験的な価値」を考えてみますと、現代的な職業の通りは、この動的なシステムが今でも存在していることの証明になっていること、そして多様性と密度、いろいろな職業の通りがギュッと集まっていることが維持されることで、独自の空間体験を維持するという点で、価値があると言えると思います。そうした貢献があるというところで、現代的な職業の通りもハノイ的な変化を支えている大事な要素だと考えています。

ハノイ的な変化や体験というのをどのように継承していこうかと考えたときに、今申し上げた「変化しながら地区の独自性を継承するシステム」として、職業の通りの機能を維持することがまず大事だと思っています。面白いのは、自由経済の中で、誰でもどこでも店を出してよいのに、同業者が集まっているという点です。さらに、この特定の通りと特定の職業の結び付きは、商業者の方にとってブランド価値を持つと認知されていることも分かりました。なので、この商業者の人たちにとっての価値を維持すること、これがマネジメントの対象と位置付けられるのではないかと考えています。さらに、さまざまな職業の通りが混在している状態を維持することも、このハノイ的な「変化しながら独自性を維持する」体験を継承していくには重要と考えています。



【図32】

「速度」と「強度」で変化を把握する試み

ここまでの歴史的な変遷から見出した話だったのですが、それを踏まえた上で、ハノイ旧市街での変化のマネジメントに向けた提案をしていきたいと思います。歴史的な変遷から「速度」と「強度」という軸を見出しましたが、これを使って実際に変化をどう把握できるか、

いま分析中の内容をご紹介します。

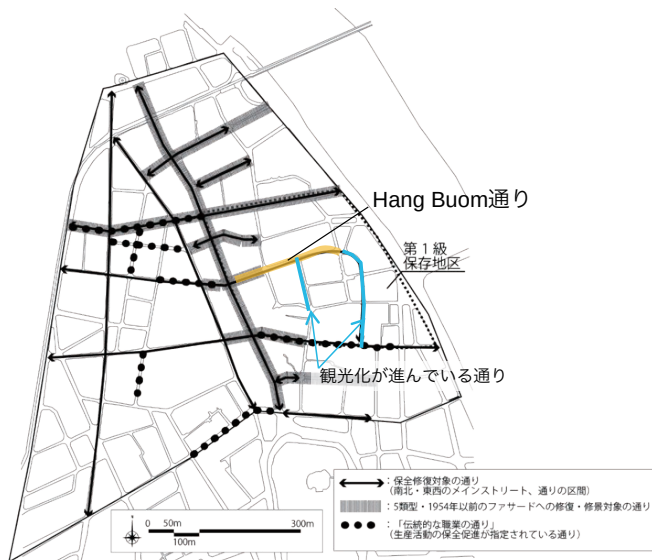
変化の強度・速度の視点を生かしていくにあたって、変化の程度の大きいところを可視化してみることを考えました。ハノイ旧市街の景観では、変化を見る対象として職業とファサードを併せて考えました。

変化の強度と速度を可視化することによって、マネジメント対象の優先順位付け、どこに重点的に介入するのか、あるいは変化の程度の大小を見ていくことで、許容可能な変化の限度の議論に対しても、基礎になるものが得られるのではないかと考えています。今回は、変化の程度を簡易的にスコア化して、具体的な通りを対象に適用してみているところです。

事例として、特に変化が速い通りを選びました。第一級保存地区の中の真ん中にある「ハンプオム(Hàng Buồm)通り」で【図33】、観光化が非常に進んでいる通りにすぐ隣接しています。集積している職業が2010年代に変わっていく、転換期にあったところを選んでみました。この通りは一部、保全修復の対象に含まれているところで、建物の色彩、素材、高さについて沿道は2～3階建て、後ろのほうは3～4階建てに規制されています。

ハンプオム通りの変化を理解する上で大事なのが、2014年から毎週末「歩行者天国事業」が行われていることです。この事業はホアンキエム区が主導して10年前から、地区の中央の通りで始まりました。金曜日の夜から月曜日の朝まで車両を通行禁止にして、お祭りみたいな感じでワーツと人が楽しめるようなかたちになっていて、徐々に他の通りにも展開していきました。今では、この「ハンプオム通り」や、さらにホアンキエム湖の周辺なども対象になっていて、特に週末になると湖畔一帯がすごく活気のある、みんなが楽しめる広場空間になっています。

「ハンプオム通り」の景観はこのような感じ【図34】です。写真でお見せしている場所は特に50年くらいに渡って集まっているお菓子屋さんがずっと残っている一角になっています。通り名の「ブオム(Buồm)」というのは「船の帆」という意味で、昔はここで船の帆が作られていました。18世紀頃から中国人が定住してきてからは中華街のような感じになって、飲食店が非常に多く集積していました。ただし中国人も1979年の中越戦争の前後で帰国してしまって、今ではゼロに近いぐらいだそうです。1990年代にはお菓子や酒類が集積していたのですが、2010年代に入って飲食店がかなり増加してきています。2017年に行ったヒアリングの中では「この通りの店は大体3年で入れ替わる」という話も聞かれて、観光客も良く通る地区内の中心部でもあることから、かなり競争の激しい通りになっているようです。



[図33]



[図34]

建物のファサードと職業の変化の分析

次に、建物のファサードと3時点の職業の変化を分析してみました。2015、17、19年と、かなり短いスパンでどのような変化が起こったのかを見ています。およそ300メートルの通りにお店が130軒ほどあるのですが、連続立面写真を撮って、沿道1階部分の職業の記録も取っておきました。さらに、ここに長年住まれている住民の方、商業者の方、また新規参入者の方を対象に、インタビュー調査も行っています。

ここではファサードの変化を分類し、それぞれの変化に対応して点数をつけました。非常にラフな分け方ですが、隣接ユニットと融合したり、建て替えてしまったり、リノベーションとか上層階の追加とか、そういった構造的な変化を「強い変化」とし、点数を2点付与しています。例えばこちらのユニット[図35]がその例ですが、前に何か変なものが付いてしまっているような変化が見られます。これがまず1つ目です。

2つ目は「表層的な変化」です。これは「弱い変化」と位置付けているのですが、ファサードの塗り直し、ドアの撤去、あと庇(Awning)の変更・撤去、あるいは看板やバナーの追加・変更・撤去といったものを「表層的な変化」と位置付けています[図36]。すぐになんとかできるようなイメージのもので、1点付与しています。

それから、「変化なし」のものは0点としました。



[図35]



[図36]

これを、2時点(2015、17年)での変化のスコアと、さらに、その後の2時点(2017、19年)の変化のスコアを足して、変化の強度の得点としています。さらに、変化の速度として、2時点で変化が連続していたものについては1点をプラスして、強度と速度を合わせた変化のスコア化を行ってみました[表2]。

職業の変化の分類も同様に、業種が大きく変化したもの、例えば菓子店からレストランになったとか、カフェから衣料品になったとか、全然違う業種になったものについては「大きな変化」として、2点としました。業種が同じで取り扱い製品が変化したもの、例えば酒店からお酒以外の飲料品店になったり、あるいは同じ食品製造業で、販売する食品が変わったものなどは「小さな変化」として1点、「変化なし」は0点というふうにスコア化しました。ファサードと同様に強度について足し合わせ、さらに、速度でも変化の連続したものについては足し合わせというかたちで合計点を足し、変化のスコアとしました[表3]。

これを地図にプロットしてみました[図37]。オレンジから茶色の丸は業種の変化のスコアが大きい小さいか、ファサードの変化は水色が小さく、赤が大きいという形で表しています。プロットしてみると、業種とファサードの両方について「通りの東側でどうやら変化が大きくなっている」というのが見て取れました。水色で示す中央寄りのターヒエン通りと、東のマーマイ通りで観光化が進んでいて、これらの通りの近くで変化が大きくなっているのが視覚的に表せました。

変化のスコア化 | ファサード

強度		速度		変化の連続	合計点
2015-2017	2017-2019	変化の種類	点数		
変化なし	0	変化なし	0	0	0
変化なし	0	表層的变化	1	0	1
変化なし	0	構造的変化	2	0	2
表層的变化	1	変化なし	0	0	1
構造的変化	2	変化なし	0	0	2
表層的变化	1	表層的变化	1	1	3
表層的变化	1	構造的変化	2	1	4
構造的変化	2	表層的变化	1	1	4
構造的変化	2	構造的変化	2	1	5

[表2]

変化のスコア化 | 業種

強度		速度		変化の連続	合計点
2015-2017	2017-2019	変化の種類	点数		
変化なし	0	変化なし	0	0	0
変化なし	0	小さな変化	1	0	1
変化なし	0	大きな変化	2	0	2
小さな変化	1	変化なし	0	0	1
大きな変化	2	変化なし	0	0	2
小さな変化	1	小さな変化	1	1	3
大きな変化	2	小さな変化	1	1	4
大きな変化	2	大きな変化	2	1	5

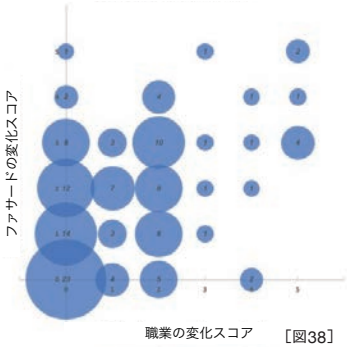
[表3]



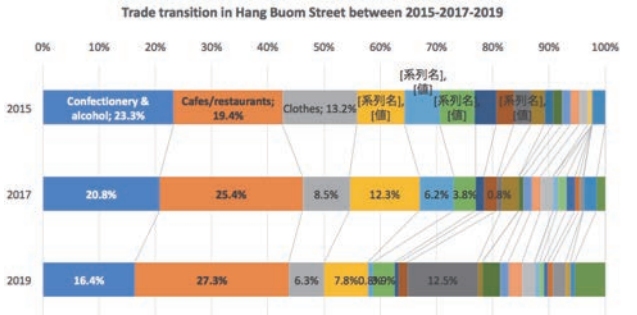
[図37]

こちらの図[図38]は、職業の変化のスコアを横軸に、ファサードの変化のスコアを縦軸に並べ、バブル1個の大きさはその点数に該当する店の件数を表しています。職業が0点、ファサードが1点のものが一番多く、次いでどちらも0点のものが多くなっています。つまり職業、ファサードともに4年間の間にあまり変化がなかったのが一番多かったのですが、職業の変化が小さかったとしても、ファサードは何らかの変化があったところが多いことが分かります。職業の変化の程度にかかわらず、表層的な看板やバナーの変化が一番多かったというのが、今回見られた傾向の一つです。

職業の集積の変遷としては、元々2004～2005年時点ではお菓子・酒類が一番多く、45%程度あったのですが、2015年時点では半分ぐらいになって(23.3%)、2019年には16.4%とさらに減っていったというのがこの4年間の変化でした。その代わりに飲食店がどんどん増えてきて、逆転していったというのが、業種の面では大きな傾向です[図39]。



[図38]



[図39]

さらに、調査を行った125件で回答が得られた65件のうち、40%が観光客をメインにしていると答えていました。ただ回答が得られたのは全体の半分なので、通り全体の約20%は観光客をターゲットにしていることがうかがい知れました。

観光客向けの飲食店に転換した事例を見てみます。この店は2015年から2017年はクリニックでしたが、2019年時点ではカフェ、レストラン、衣料品店、貸しスペースを含む複合施設に変化していました[図40]。ここはファサードは守られているのですが、中が全部リノベされて、こんな感じのおしゃれな場所になっています[図41]。ただ沿道の空間は駐車場になっていて、残念ながらお店の空間ではなくなってしまっています。他にも、3つのユニットをナイトクラブ兼タトゥー屋兼理髪店に転換し、奥は宿泊施設にするというような大技をやったところもありました[図42]。ちなみに、ここは規制の中で価値がある住宅に指定されていたのですが、中はこんなふうに大きく変えられてしまっているため、規制が十分守られていないことを示す事例と言えます[図43]。



[図40]



【図41】



【図42】



【図43】

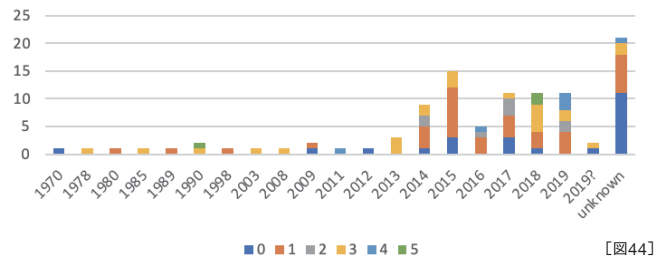
今後の分析タスク

ここまで、ハノイ旧市街で起こっている変化を可視化する試みをご紹介しました。今後は引き続き、業種とファサードの変化の関係を分析していく予定です。詳しく職業やファサードの変化要因を検討するにあたっては、地価や所有者個人のプロフィールも関係してくるため、ビジネスの所有者が「どういった意図でこういうリノベをしているのか」、それが「ファサードにどのように表出しているのか」を、インタビュー内容から見ていこうと思っています。

所有権も一つ鍵になるところです。自宅兼店舗の人は結構少ないようで、インタビューからは、昔から商売をしている人たちの中では手前でお店をやって裏に住んでいる人が多かったのですが、新規参入者の人たちはほとんどが地区外の方でした。1階沿道の店舗のスペースを借りて、リノベして、店舗空間として使い、自分は別のところから通っている人が多かったです。あるいは、先ほどのコンプレックスのように、1棟を丸々賃貸して敷地全体をリノベしているやり方が流行っているという話も聞きました。このように所有権、あるいは賃

貸のスタイルというのは、この地区の景観の変化に大きく関わってきそうです。

あと、開業年度の話でも、直近2年くらいに開業した店舗で、ファサードの変化スコア[図44]で5点以上が多くなっているところもあり、「ファサードをガラッと変えてアピールしよう」という意図があるのかなと想像しています。



【図44】

まちの変化の仕方をマネジメントに入れ込むには

では、最後にまとめます。「そのまちならではの変化の仕方をマネジメントに入れ込むにはどうすればいいのか」をずっと考えてきました。そのために考えられることとして、「変化を見るためのマネジメントする対象を一つ決める」ということがあります。私はこれまで、「職業の通り」を対象として考えてきました。変化をマネジメントする対象の歴史的な変遷を、文献や観察により調べて、それによってどのような変化をしてきたのかというパターンを見出しました。職業の通りでは、それ自体が動的なシステムとして働いているということと、その中心には商業者の人が見出しているブランド価値があるということが、調査で分かりました。

後半のお話では、変化の「速度」に加えて「変化の強度」も設定して考えていきました。「職業の通り」における変化の強度は、職業が全然違う商売になるというふうに設定しましたが、それぞれの地域で重要なものを設定し、その「変化の強度」とは何を指すのかを考えること、つまりこの視点をどのように地域ごとに読み替えるかを考えていくことが、とても大事だと思います。

また、変化の様相というのは、恐らく速度・強度以外にもきっと何かあるのではないかと感じます。その地域・地区から見出された独特の変化の捉え方を考えていくことで、変化のマネジメントを他のまちで考える際に、より重要な知見になるのではないかと思います。それぞれの地域の変化を吟味した上で、変化を捉える視点を掛け合わせて基準を考えていくことが重要になると思います。こうした基準を考える際には、そのまちに住む人、商売する人、訪問する人、さまざまな人の参加型で考えていけると良いと考えています。

発表は以上になります。ご清聴ありがとうございました。

DISCUSSION

石田敏明(神奈川大学工学部教授)

山家京子(神奈川大学工学部教授)

チョン イルジ

鄭一止(熊本県立大学環境共生学部准教授)

藤原ちから(orangcosong)

西堀隆史(タイ／モンクット王工科大学トンブリー校講師)

上野 柏原先生、ありがとうございました。すごく濃密なリサーチの結果を教えていただいて、まだ頭が全然処理し切れていない状態ではありますが。

それでは質問とご意見などがありましたら、どなたかお願いしたいと思います。

石田 興味深いレクチャーをありがとうございました。現在、ベトナムでは非常に地価が高騰していると聞いています。また、2025年頃には人口も1億人程度になると聞いているのですが、そうすると、恐らく都市部に人口が集中してきて、ますます過密になっていくように思えるんですね。それと店舗の変化について、その所有形態がどういうふうになっているのか、土地と家屋、建物の所有権がどういうふうに絡んできて変化していくのかということをお聞きたいのですが。

柏原 ご質問ありがとうございます。店や家の所有権ですが、まず土地は一応、形式上は全人民のものとなっているのですが、もうすでに使用权を所有権と同様の扱いで使っているというのが一つ前提としてあります。その使用权、すなわち所有権のようなものを、普通に売買したり、賃貸として貸したりできる状況になっていると聞いています。

ただ、先ほどお見せした3棟ぶち抜きでやっている事例では、現地の先生も「これはどうやってやったのか分からない」というぐらい、一体どうやって所有者をまとめたのかが分からないようなことも起こっているようです。「ここのオーナーはどうやって所有権の問題を乗り越えたのか」を調べていきたいところではあるのですが、これまで見ていたようなやり方とは違う所有権のまとめ方なり、買い方なりがあるのかなと考えています。

石田 ありがとうございました。そうすると、この3棟ぶち抜きというのは、空間構造が完全に変わってしまっているわけですね。

柏原 そうです。

石田 資本がどういうふうに入り込んできて、そういうことが起きてくるのがよく分からないところですが、今後の予測として、こういうこと

が頻繁に起こってくる気もします。そのあたりはいかがでしょうか。

柏原 そうですね。旧市街の建て替えがなかなか進まなかった理由の一つに、所有権が非常に複雑化したことで合意形成が得られなかったことが挙げられます。外資が入ってきても、全世帯分の合意を得ることが難しいから変えられなかったという状況があったらしいです。ただ、旧市街の人口密度が高すぎることはずっと問題になっていて、ここの人を移住させる計画がもう進んでいるはずですよ。どの程度進展しているのか把握できていませんが、本当にこの計画が進んだ場合、所有権が複雑だったところもどんどん空気が出てきて、合意が取りやすくなってしまいうことが課題としてあるのではないかと思います。

なので、その住民移転計画がどんどん進行していった段階では、先ほどの3棟ぶち抜きのやり方もかなり簡単になってくるのではないかと思います。私もすごく危惧しているところです。どうなっていくのかなと思っています。

石田 ありがとうございます。

山家 すみません、もしかすると一番最初にお話しされたのかも知れないのですが、何か景観規制みたいなものはあるのですか。

柏原 地区全体に高さ規制があり、沿道は3階建てまでで、後ろは4階建てまでです。素材はレンガや漆喰壁、ペンキはOKで、コンクリートスラブは駄目です。色彩もクリーム色系の伝統的な色彩に調和するものというかたちで、規制は存在しています。

山家 だけど、この規制は例えば間口を守らないといけないというか、いわゆる伝統的なすごく長い町家のスタイルを保護するものではないですよね。特にファサードは、素材と色彩さえ残せばかなり変えられるということでしょうか。

柏原 建築計画管理規制では、「町家の空間構成も保全する」とは一応、書いてあるのです。ただ補足として、「隣接している2つのユニットを結合する場合には、ファサードはちゃんと分割しておく」といった内容が書かれていて、ちょっと抜け道的な感じになっているようです。

山家 隣とくっ付けているような建物は、外から見たらファサードは分かれているけれど、中でくっ付いてしまっているということですね。中の空間構成は、中庭が屋内化されたり、かなり変容しているところもあるのでしょうか。建築の変容というところだけ見ると、先ほどの

界壁を越えた一体化と、本来であれば「中庭、インテリア、中庭、インテリア」とつながっているのが、中庭が室内化されてしまっているように見えます。

柏原 そうですね。中庭の室内化は自力改造のようなかたちで、住民の方たちが自分でやってしまったり、あるいは、2階部分を持っている人が上に増築したり、そういったかたちで自由にやってしまっているところもかなり多く見受けられます。

山家 分かりました。ありがとうございます。

鄭 今の話に関連すると思うのですが、行政は改修に対して補助金を出したり、モデルハウスを造ったりするなどの促進事業はやってますか。

柏原 補助金は、今の段階では「規制には書いてあるけれども、やっていない」という状況です。モデルハウスは一応、フランスが行った国際協力事業の中で、「ザ・伝統的な町家」の保存改修を行った家をミュージアム的に残しているところはあります。ただ、それを見て「私もやろう」というよりは、「ファサードを残しておくといい雰囲気になってお客が来るから、うちもやってみようかな」というレベルで、町家の構成をそれによって残そうというインセンティブ（動機付け）にはなかなかない印象があります。

鄭 今、柏原先生が言われたように、この間口の狭い奥深い構成は、観光地のイメージとしてはかなりシンボリックになっているということですか。

柏原 観光地として見に行けるところは、ミュージアム的なところしかほとんどないですね。みんな住んでいるから、特に中は案内してもらえないです。だから、町家で構成される観光地としての魅力は、狭い間口の町家がギュギュギュッと詰まって、そこで活気のある商売や生活が行われている景観はいえると思うのですが、行っただけでは、「その奥にも長細い空間がある」ということは、知らなければあまり意識されないかなという感じです。

鄭 ちなみに、ガイドブックとかにはそういうことは書かれたりしていますか。

柏原 どうでしょう。その辺はガイドブックをあまりしっかり読んでいなかったのですが、町家の構成に言及しているところはあまり覚えがないですね。町家博物館はどのガイドブックにも載っているのです

が、「そこで伝統的な町家を見られますよ」と書いてある感じです。

鄭 分かりました。状況がかなり伝わりました。

余談になるかもしれませんが、熊本は城下町で、「新町・古町」というエリアが比較的町家が残ったり、町割りが残っているところです。やはり道それぞれに名前が付いていて、昔は似たような業種が集まっていたといわれていて、「昔はこういう状況だったのかな」と想像しながら聞かせていただきました。

柏原 そうですね。両替町とかは京都にもありますし、伏見にも職業の名前が残っている通りは結構今でもあって、日本でもすごくあるのだなと思っています。

藤原 通りの名前ということで興味深いのですが、ちょうど最近、イスのローザンヌというところで気になった通りがあって、そこにフォーカスしたプロジェクトをやりました。ハノイではフランス語の影響なのか、通りの名前に昔のギルドや職業の名前を残すことがどこから来たのかが一つ気になりました。つまり、フランス植民地の影響があるのかどうかということです。

もう一つは、中国との関係性なのですが、東南アジアにいろいろ行っていると、華僑というか、中華系の移民の影響をものすごく感じます。要は混ざり合っていくわけですね。言語もそうですし、血としても混ざっていくという中で、結構複雑なアイデンティティーを持っている人が多いという印象があります。しかも、中国のどこから来たのかというのが、何代かたった後も実は結構残っているのですよね。多分、家庭内でそういうのが継承されていくのか、「自分の祖先がここから来た」とか、そういうのを結構よく聞きます。例えばそれがハノイにおいてどういう影響を与えているのか、今は全然ないのか、あるいは、そういうのが特に商売をやっている人の中にあるのかというのは気になります。

それは「何をもって伝統とするか」というところに関わると思うのですが、それを保全するとき、その植民地の歴史をどういうふうにかこのまちの人たちが捉えていて、どういうふうに関承していきたいのかということに影響するのか、しないのかといったところが、お話を伺っていてちょっと気になり、コメントさせていただきました。

柏原 ありがとうございます。まず、通り名についてなのですが、通り名が「ハン（Hàng）」で始まるものは、元々ベトナムにあった名前になっています。ただ、植民地期にはフランス語の名前に変えられたというのがありまして、例えば「帽子通り（Hàng Nón）」は「Rue des Chapeaux」、「紙通り（Hàng Giấy）」は「Rue du Papier」のような名前に変えられました。他にもフランス人の偉人の名に変えられた

ところもありますが、それらは独立してからベトナム語の名前に戻しました。なので、通り名としては植民地期に一遍変えられたけれど、もう一遍、自分たちの名前を取り戻したという経緯があります。

中国の影響については、ランオン(Lân Ông)通りに福建人が住み、ハンプオム(Hàng Buồm)通り周辺に広東人が住むというような分け方がされていたようです。今でも福建会館、広東会館がそれぞれの通りに残っているのですが、文献によると、広東人は地元の人と混ざらずに暮らしていたようです。自分たちのまちだけで、中国語だけで完結していたらしいのですが、福建人の人たちは比較的ベトナムの現地の人と混ざり合って生活したり、結婚したりしていたということがあったそうです。今も福建人の人たちがいたランオン通りには、先ほどの漢方薬店の集積が残っていて、それは元々中国の人が持ってきて始めたものが今でも定着しています。それが次の話につながっていくのですが、ここが今でも伝統というか、職業の通りに指定されているということがあって、「そこは守っていきましょう」という流れになっています。私は元々中国にルーツのある人に直接会ったことはないのですが、ベトナム人化している人たちがランオン通りには住んでいるようです。ランオン通りを詳細に見た文献もありましたが、その記述の中でも「(現在住んでいる)彼らは中国人だ」という話も特になかったような気がしますので、昔ベトナムの人と混ざり合った、中国にもルーツを持つ人が、家業を継いでいるのかなと考えています。

植民地の歴史と捉え方については、正直、あまり深く聞けたことがないのですが、ただ建物の保存の話で言いますと、植民地の影響を受けたファサードも、このエリアならではのものとして捉えられているという印象があります。なので、少なくとも文書の上では、植民地の影響も、このエリアで積み重ねられてきた歴史の一つという捉え方がされているのではないかと気がしています。

一つ、特に大きいのは、やはり観光化が進んだところです。元々、植民地系の遺産はあまり顧みられていなかったらしいのですが、このまち並みが観光資源として「お金を持ってくる」ということが認識され、特に1990年代に入って観光客が多く来るようになって、「まち並みが資源になると分かってからは顧みられるようになった」という論文もありました。なので、結構「お金が儲かるのだったら、コロニアル様式を維持する」というところもあるようで、そこは「実を取っているな」という気がしています。

上野 先ほど山家先生が聞いた規制の話ですが、基本的に建て替えはOKなのですか。

柏原 本当は駄目らしいのです。2004年にこの地区全体が文化財になったときの法的文書に、「地区内の建設行為は一切禁止する」と書いてあります。でも、全然守られていません。その抜け道として、賄

賂を贈るとか、あと「違反しても、罰金を払えばいい」「罰金を払うほうが手間もないし、それほど高くない」というようなことがあるらしく、本当は建て替えてはいけないけれども、やっちゃっているという感じです。

上野 なるほど。それは例えば「ファサードだけ残して後ろを造り変える」という大規模改修も当然あるということなのですね。

柏原 そうですね。見てみると、実際にそれは存在しているので、規制はあるのに行われているのだなという感じです。

上野 この旧市街地は、事業者さんにとってはかなりクールな場所なのですか。みんなが出店したい、そういう場所になっているのですか。

柏原 元々、商業地区としてのステイタスはかなり高いエリアになっているそうです。地価にも反映されているのですが、通りによって、中心を通るメインストリートは他の通りの2倍ぐらいの値段が公示地価としてあります。ここは最後にお見せした「ハンプオム通り」というところですが、高い方から第二、第三グループのような地価になっています。

一昨年聞いた話だと、ここは「飲食店がめちゃくちゃ集まってきている飲食店通りになってきている」と認識している人が複数いらっしゃるって、その人たちは他のところにも自分の店舗を持っているということです。中には、旧市街の他の通りにお店を持っているけれども、「ここでチャレンジする」といって出店している人も結構いらっしゃいます。なので、「ここは観光客もたくさん来るし、飲食店の集まっているところだし、ここで勝負する」みたいな気概が透けて見える感じがします。

上野 なるほど。観光のホテルがたくさん並んでいるのは、2本の通りの辺りということですか。

柏原 そうです。ターヒエン通りは飲食が中心ですが、飲食とミニホテルはこの辺り(マーマイ通りやハンプオム通りの南側)にすごく多いですね。

上野 観光が割と浸食しているといったことをおっしゃっていましたが、見方を変えると、場所が限定されている感じがして、「結構抑えられているな」という印象もあるのですが。なおかつ、観光があることによって、要は経済活動につながっているわけですよね。その辺りの評価はどうですか。やはりすごく支配的な感じに捉えられているのか、あるいは何か新しい経済のエンジンが集積し始めたかと捉えてい

るのか、どちらなのでしょう。

柏原 このエリアは、行政の方は「来過ぎていて、もうちょっとバランスを取っていかないといけない」というふうに考えられています。それで、ホテルが集まっている通りは、上野先生がおっしゃったとおり、ハンプオム通り近辺の通りに特に集まっていて、あとは他の通りにもバラバラある程度なので、そういう意味では、確かに「今のところ、抑えられているとも捉えられなくはないかな」という気はしています。

ただ、このエリアは第一級保存地区で、一番守らなければいけないところなのですが、そこがまさに観光に浸食されてしまっているのは、この地区の保全方針としてちょっとどうなのかと、個人的には疑問に思っています。

上野 なるほど、分かりました。最後の質問です。マネジメントについて言及されていますが、そのマネジメントする人というのは誰なのでしょう。

柏原 そうですね。それは本当に大事な質問なのですが、このエリアを見ている行政の部署があります。旧市街があるホアンキエム区の直轄の部署で、ハノイ旧市街管理委員会というところがあり、マネジメント主体として存在はしています。そこが中心になって調査事業を請けたり、計画規制の素案を作ったり、あとは建築許可申請のときにチェックしたりしているみたいです。ただ、その辺のプロセスは今まであまり詳しくお伺いできてなくて、現状を見ているとかなりザルみたいにも見えます。どういった感じで規制を運用しようとしているのかはまだ見えていないのですが、一応、その行政の部署が担当になっています。

上野 「通り会」というような、いわゆる地域の人たちのまとまりはないのですか。

柏原 町内会はありませんが、そこはすごく機能しています。通りのもう少し広い範囲で、区の下に「坊」という組織があるのですが、その会は参加率90%越えになっているところも結構多いらしいです。町内会的な組織としては、行政の連絡の伝達とか、あとは相互扶助の機能もあるそうですが、「町内会起点で守りましょう」といった動きは、今現在はなかなかない状況です。

上野 なるほど。「マネジメントの主体はたくさんありそうだな」という印象があって、その階層ごとにいろいろなアプローチが恐らくあって、先ほどの評価軸に加えて、さらにそのマネジメント軸みたいなもの

のが出てきて、それが複層的にプランニングが重なっていくというかたちがあり得るかな、というふうに思った次第です。

柏原 ありがとうございます。そうだと思います。

山家 もう1点、お聞きしたいことがあります。元々は宮廷に収める職人さんたちが製造を伴って集積していたわけですよね。製造することとは集積する利益があるので、それで通りが出来上がっていたと思うのですが、現在、宮廷との関係は切れているのではないのでしょうか。

柏原 もう切れています。

山家 そうなると、製造するという行為が消えた瞬間に、集積の利益はそもそも弱くなっています。商売だけを考えると、競合するものが離れていたほうがむしろ都合がよい場合もあります。そうした中で、こうした通り名に見るギルドみたいなものをどう残していくのか、やはりそこは知恵が要るのだらうなと思いました。

観光に対してはいろいろな国や都市が同じ悩みを持っていて、観光業がまちにちょっと来てくれる分にはいいけれども、それがあー線を越えてしまうと元のコンテキストを壊してしまう。例えば、パリのムフタルは「パリっ子の胃袋」と呼ばれている商店街ですが、リピーターが何回もパリに行くうちに、「パリっ子のような暮らしがしたいわ」といって訪れるような場所です。そうした観光客がどんどん入ってくるようになると、それに向けた観光のお店が立地し始めます。

パリの規制の仕方は、観光業が入ってくるのを抑えられないから、「華美な装飾は認めない」というような規制をかけました。華美な装飾ができないと、いわゆる観光のお店が出店をためらうという理由から規制しているのです。バステューにはインテリア家具工房が並んでいる通りもあって、製造業とくっ付いているのですが、バステューのオペラ座ができて観光客が入ってくるようになったので、やはりそこも「華美な意匠は駄目です」という規制をかけています。

ただ、ハノイの場合は元々混沌としたところが魅力だったりするので、「そういう規制も違うだろう」と考えたときに、観光業の数のバランスをコントロールするのはなかなか知恵が要りそうだなと思って見ていました。感想のようなものですが、もしお考えがあれば教えていただければと思います。

柏原 本当におっしゃったとおりだと思います。ハノイを比較的望ましい集積、同業者の集まりにしていくには、フィジカルな部分からの規制をどのようにかけていけばいいのかということは、これから本当に考えていかなければと思っていたところでした。

「華美なやり方にしない」と言っても、すでに結構規制されているところでも華美な装飾はあります。日本人的な感覚からすると不思議で、「規制があるのにどういつもりでやっているのかな」というのをインタビューから聞きたかったのですが、なかなかはっきり聞き出せず、「なんとなくミニマリズムなやり方をしたかったから、こういうふうにした」という回答で、「ここは歴史地区だから調和させよう」といった意図はそれほど見受けられませんでした。だから、どこを突破口にして、どこを突いていけばもうちょっと誘導できるのかというのは、引き続き考えていきたいと思っていますところですよ。

ギルドの話については本当におっしゃるとおりで、計画経済期の時に個人事業が抑圧され、製造しなくなったために解体されたのですが、今、それがない自由経済の中で同業者が集まってきているということは、個人的にはすごく面白いなと思っています。

それは、一つはやはり問屋さんが多いということもあります。恐らく、日本橋横山町の問屋の集積と似たようなかたちで、小売り業者の人が買い回りができるというのが、集積のメリットとして存在しているのかなと推測しています。他の有名な通りについては、その通りで衣料品問屋をやるのがブランドというか、店主にとってもステータスになるということが認識されていて、似たような話は他の通りでも聞かれました。そのブランド価値を商業者の方たちが認識しているということ自体が、その通りの価値を決めているのではないかとこのことを、仮説として思っています。今回は客観的な目からしか調査ができていないので、そこをもっと、いろいろな人に聞いて深めて、引き続き考えていきたいところでもあります。

西堀 こちらの状況ともすごく重なるところがたくさんあったので、いろいろと聞きたかったのですが、「守られていない」というのはどうするのでしょうか。

柏原 そうですね。

西堀 守らないじゃないですか。それで、行政が入って大きい保全をやってしまうと、結局、観光地みたいになってしまいますよね。昔から商売をしている人たちというのは、そんなにお金を持っているわけではないと思うのです。すぐリッチではないので、続けようと思っていて、どうにかしようとしていて、同じ場所から少しでも多くのお金がほしいのですよね。なので、「少しでも客を引こう」と考えるわけじゃないですか。そうすると、そんなものは守ってられません。それでいて、袖の下は絶対止まりません。先ほど、「罰金のほうが安い」と言われましたよね。実際にはそういったこともあり得ます。例えばバイクなどは、登録するより捕まるたびに警察にお金を渡した方が安上がりだったりします。

そうかといって、自分の周りでも新しい商売を始める人が多いのですが、新しいことを始めるのに、今すぐお金になることをやる、もしくは、やろうとするじゃないですか。なので、「その人たちと一緒に保全をしていくのはすごく難しいな」と、聞いていて思いました。

私は、バンコクでの生活も長く、いろいろなことを見てきたのもあり、ハノイとかなり近い状態にあると感じました。そういった社会の状況や背景など、いろいろと考えを巡らせると、話が大きくなってきてしまうのですよね。経済の話、都市全体の話になってきてしまうじゃないですか。なので、1カ所だけを見て何かをしていくことができなくなってくると思うのです。つまり、根本的な社会構造、経済構造ごと変えないと難しいという結論に行き着き、極端な格差、権力、富の集中、ぬぐえない階級社会などにぶち当たるということですね。そしてみんな諦めるという悪循環ですね。

ルールを「守ってくれ」と言ったって、彼らは守りたくないですからね。明日のご飯のほうが彼らにとって重要なのですから。そういう人々と話をしていると、何かを進言するのが案外きついです。向こうから切羽詰まった言葉が出てきてしまうので、そうすると、「そうだよね」と言うしかなくなってしまいます。「いや、俺、今度また子どもが生まれるし、お金要るしどうにかしたい、借りてくれる人いるし」、「別にいいじゃん。正面を残しているし」とか言われてしまう。はたまた、「あそこの警察のボスがOKって言ったんだよ」とか言われてしまうのですよ。難しいですね。

柏原 そうですね。説明しても守らないから、本当は規制じゃない、インセンティブの方面が必要なのだろうとは思っています。今おっしゃったように、補助金もないので、「金、誰が出すんだ？」と言われても、出ませんから。そうすると、短絡的にファサードを変えようとしている人たちに、どうしたらましなやり方でやってもらえるか、保全的にやってもらえるかというところを突いていくには、間接的な規制と、どういうインセンティブの積み方をするかという両面から考えていかなければいけないと考えているところですが、まだ答えは出ていません。

上野 だいぶ盛り上がってきた感じはしますけれども、この辺りで本日の講演を終わりにしたいと思います。改めまして柏原先生、今日はどうもありがとうございました。

Vol.1

客家の円型土楼 ― その建築様式と集住の知恵

講師: 重村力 (建築家・工学博士)

日時: 2020年11月9日

Vol.2

ハンドメイド・アーバニズム

講師: 尹柱善 (建築都市空間研究所まち再生センター長)

日時: 2020年12月7日

Vol.3

台湾における都市の歴史的環境保全

講師: 藤岡麻理子 (横浜市立大学グローバル都市協力研究センター特任助教)

日時: 2021年2月1日

Vol.4

「竹」の活用で1分の1から、1万分の1まで ― カレン集落の再生プロジェクト

講師: Terdsak Tachakitchachorn (バンコク チュラロンコン大学建築学部 Assistant Professor)

日時: 2021年2月22日

Vol.5

ベトナム・ハノイ 変化する都市の文化遺産

講師: 柏原沙織 (東京大学大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻 特任助教)

日時: 2021年7月20日

Vol.6

ベトナム・サイゴンの建築と都市の文化

講師: 李暎一 (一般社団法人アジア建築集合体 会長)

日時: 2021年8月25日

Vol.7

メトロマニラにおける参加型社会住宅 People's Plan: 参加の価値の再考

講師: 白石レイ (山口大学大学院創成科学研究科 准教授)

日時: 2022年3月2日

発行 神奈川大学アジア研究センター

〒221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1 電話: 045-481-5661

デザイン 丸山智也、野中優衣 (マルヤマデザイン)

編集 吉岡きくみ

2022年3月24日発行